

オーディオ実験室収載

LP-12 導入顛末記(1)

－導入準備－

アナログシステムの現状はターンテーブルが Victor の TT-81 と Garrado 401 で、Osaka Cable の Lead Console Lab. II にマウントした TT-81 には FR-64S と Audiocraft の AC-300 II のダブルアームを装着し、Garrado 401 には SME3009 を装着して使ってきました。かねてからアナログのクオリティをもう少し上げたいと思っておりましたが、その理由はオーディオ的なグレードを上げると言うよりも 20 歳台から溜めこんできた LP をもういちどじっくり聴きこんでみたいという動機からです。

このため、いろいろと調査を進めてきましたが、LINN ショップで LP-12 を聴き、その音質に納得して導入の方向でさらに検討を続けました。最終的な判断は、マスター音源が同じアナログと CD を LINN ショップに持参し、LP-12 のアナログと CD をリッピングした ACCURATE DS とを比較し、前者の方が自分の好みと一致しましたので、LP-12 の方が DS の導入よりは現実的と考えたからです。

構成としては、なるべく安価に上げるために既存のアームとカートリッジを流用することとしました。電源は VALLHALLA の後継器とし、底板は重要と考えて TRAMPOLIN を採用しました。アームは 3 本のアームの中から重量級の Ortofon のカートリッジを使うことも考えて LP-12 には FR-64S を組み合わせました。また、Garrado 401 の SME3009 を外して AC-300 II と入れ替え、2 系統のアナログシステムを継続することとしました。

さて、トランスやフォノイコをどうするかということですが、メインは、しなの音蔵のトランスとしなの音蔵のプリアンプのフォノイコを使うことにしました。また、47 研の Model4718 のフォノイコ出力はライン入力することとし、Ortofon の純正トランス STA-6600L 経由で若松通商 Marantz 7 Type Kit のフォノイコを使い、これもライン入力を可能とする経路も作りました。一方、Garrado 401 の方は Bayer のマイクトランスを流用したトランス経由で、しなの音蔵のプリアンプのフォノイコを使うことにしました。

カートリッジについては当面 SPU Synergy, Ortofon Contrapunkt a, Ortofon SPU Royal N を適宜 FR-64S にセットすることとし、SPU Classic G を AC-300 II にセットしました。LP-12 のメインシステムのカートリッジは 3 者を聴き比べ、PC オーディオに音質が近似した Ortofon SPU Royal N を当面セットすることにしました。従って、当面何も書かない場合は、【Ortofon SPU Royal N→FR-64S/LP-12→しなの音蔵トランス→しなの音蔵のプリアンプ】という経路で聴いております。なお、FR-64S のフォノケーブルはこの機会に Ortofon 製から LINN のフォノケーブルに替えました。また、

トランスからの引き出しケーブルも LINN の RCA ケーブルに替え、極力 LINN の特徴を活かすようにしました。

さらに上記の組み合わせ以外にもカートリッジは Ortofon MC20, EMT XSD-15, Ortofon SPU GE, DENON DL-103, FR-1 MkIII, FR-7 などが、トランスは Northern Electric, Partridge TH-7834, DENON AU-320 などが、Head Amplifier は Mark Levinson JC-1 が、フォノイコは McKintosh C29, Leak Point 1 などが控えとしてありますので、今後いろいろと組み合わせを変えて楽しむ予定です。

Garrado 401



しなの音蔵オリジナルプリアンプ



以上